

## サウダーデの文献学的研究に向けて

黒澤 直俊

はじめに

1. 文献学的研究 *estudo filológico* としての「サウダーデ」
2. 語源辞典などによる調査
3. Cunha 2014 の用例
4. 用例の検討
5. *saudade* ~ *soidade* と翻訳

終わりに

はじめに

ポルトガルの文化や文学において「サウダーデ」*saudade* は特別な言葉であるらしく、ポルトガル語にのみ存在する語として吹聴されることすらあるという(池上他, 2001, pp.131-132, 項目は池上岑夫による)。ポルトガルの古典的文学事典である Coelho 1984 は, "saudade" の項目で, ポルトガル文学, ガリシア文学, ブラジル文学のそれぞれにおける "saudade" の文学潮流を解説しているが, 冒頭で次のように述べている。

「サウダーデは, 目の前にない幸福, すなわち遠くにあるか, 時間とともに過ぎてしまった何かあるものに対する, 痛みを伴うような, 甘い哀愁のこもった思い出であり, その失われた幸せを再び取り戻したいという欲求が混じった思いでもある」

“A saudade compreende a lembrança, pungitiva ou docemente melancólica, dum bem ausente, algo que está longe ou que passou na carreira do tempo — lembrança a que se junta o desejo de reaver esse bem perdido; ...” (この部分の執筆は Jacinto Prado Coelho, pp.1002-1005)

「サウダーデ」についての議論では, このような内容に続けて, 文学や文化の中での「サウダーデ」, さらにポルトガルが王政から共和制に移行する時代の前後に見られた「サウドズィズモ」*saudosismo* と称する「サウダーデ」の概念を思想の中核に据えた運動などについて語られるのが常である。上で引用した Coelho 1984 では, ガリシア文学での「サウダーデ」に関連して, ガリシア語には類語に *señerdade* という語があり, 語源がラテン語の *singularitatem* であることに言及しているが, これはアストゥリアス・レオン語の同様の概念を表す語との関係で興味深い。なお, 現代ガリシア語では *saudade* も用いるが, ガリシア語本来の語形は *soidade* である。

本稿は, 言語史の観点から, 特に, ポルトガル語の初期の文献に現れる「サウダーデ」に対

応する語の分布に焦点をあて、問題の所在を明らかにしようとするものである。関連する先行研究を網羅したものではなく、中世語での語形の分布を出発点として問題の本質と今後の研究の可能性を示そうとするに過ぎない。

### 1. 文献学的研究 *estudo filológico* としての「サウダーデ」

本稿は、文献学 *filologia* そのものの定義や考察を目的とするものではないが、イタリアやスペイン、ポルトガルなどでの近年の学術的な慣行に倣い、文献学を「真の言語テキスト＝オリジナルの確立を中心課題として、それにとまなう様々な言語的文獻的問題を対象とする研究分野」としておく。冒頭で述べたように、“*saudade*”にはポルトガル語圏文化のキーワードのような側面があるため、いわゆる「サウダーデとは」と類する論考は枚挙にいとまがない。しかし、本稿のような立場からの考察には、語彙的なレベルで、冒頭にあげた文学事典のような *saudade* の定義でも十分と思われる。例えば、コーパスに基づいて編纂され、かつ学習者向けの辞書としてポルトガルで定評のある Guedes 2008 は、*saudade* を “*sentimento nostálgico ligado à memória e à recordação de alguém ou de alguma coisa distante no tempo ou no espaço.*” 「時間や空間の上で遠く離れた誰かや何かについての記憶や思い出に関係した郷愁的感情」(apud *saudade*, p.1086) とし、複数形の *saudades* が “*saudações ou lembranças que se enviam a alguém que está ausente*” (ibid.) 「目の前にいない誰かに対し送られる挨拶」の意で用いられるとして用例を挙げている。

次に、現代語の言語形式を見てみると、規範では *saudade* であるが、口語ポルトガル語では *au* ~ *ao* [aũ] (または [aw]) が単母音化して [ɔ] となることがあり、結果的に *saudade* ~ *s[ɔ]dade* というバリエントが存在する。さらにミーニョ地方の方言の語彙集などを調べてみると、*soidade* ~ *soudade* を挙げているものがある (Sequeira 1957, pp.77-78)。ポルトガル語において二重母音の *oi* と *ou* が一部の語で交代する現象は一般的にみられるので、このようなバリエントは不自然ではない。他方、中南部方言では *ou* > *o* [o] の変化は広く一般的な現象であるが、ミーニョ地方のような北部方言の領域では伝統的にこの *ou* > *o* の単母音化は起きない。この *soudade* に起源する語が中南部で単母音化を受けたとしても、語形は *s[o]dade* となり、母音は [o] である。言語学的には *saudade* から変化した *s[ɔ]dade* と、仮にあるとしても *soudade* に起源する *s[o]dade* は異なることに注意する必要がある。16世紀頃のポルトガル語では、この語は *saudade*, *soidade* (~ *soydade*), *suidade* (~ *suidade*) などで見れる。i ~ y は綴り字のバリエントで言語学的な意味はない。16世紀前半、1536年頃まで劇作家として活躍した Gil Vicente の作品には *saudade* が 11 例、*saudades* が 2 例、*suidade* が 2 例、*suidades* が 1 例 (*suidade*, *suidades* の資料上の綴りは *suydade*, *suydades*) 用いられている。しかし、Gil

Vicente の作品は、一部を除き、著者の死後おそらく 20 年前後が経過してから 1562 年に出版された全集によって知られているため、16 世紀前半の状態を本当に反映しているという保証はない。Gil Vicente には *suidade*, *suidades* というバリエントがあるが、これは田舎出身の登場人物を性格付けるために用いられている可能性があり、作品全体では *saudade* が一般的であるように考えられる。さらに時代をさかのぼり、13 世紀あたりになると *saudade* は現れない。その時代はもっぱら *soidade* ~ *suidade* (およびその綴り字上) のバリエントだけが用いられている。語源的にはラテン語の *sōlītās* の対格形である *sōlītātem* を想定し、*i* > *e* の変化やガリシアポルトガル語特有の母音間の *l* の脱落とそれに伴う変化で *soedade* > *soidade* ~ *suidade* を説明することに音声変化上矛盾はない。なお、*soedade* は Vasconcellos 1914 では 15 世紀の *Cancioneiro Galego-Castelhano* にあり、*Cancioneiro de Baena* の例が挙げられているが (ibid., pp.50-51, pp.124-125), その時代にポルトガルで作成された文献の中では極めて少ないように思われる。これに類似したことは、やや時代が下るが、動詞の 2 人称複数語尾で 15 世初めに起きた、母音間の *d* の脱落による変化、*-ātis* (ラテン語) > *-ades* (古ポルトガル語) > *-aes* > *-ais* (現代語) でも、子音が消えて、母音接続によって 2 音節であった段階から二重母音化し単音節へ移行する過程での *-aes* (*-a·es* ~ (>) *-aes* を反映する形) がほとんど見られないことを想起させる。なお、これら初期の *soedade* (?), *soidade*, *suidade* はすべて 4 音節語であったことが詩形の音節数から確認できる。ロマンス語からガリシア・ポルトガル語に至る過程で母音間有声子音の脱落によって母音接続が生じ、これが単音節化していくプロセスが多く見られるが、有声子音の脱落が子音によって時代が異なることから、単音節化のプロセスもかなり長い期間にわたって生じていたと考えられる。その最後の現象が、上で触れた 2 人称複数語尾における *-d-* で、15 世紀初頭あたりに起きたものと考えられるが、こちらの *\*soledade* > *soedade* の変化はガリシア・ポルトガル語とアストゥリアス・レオン語などを隔てる特徴のひとつである、9 世紀末から 10 世紀初めあたりに想定されている *-l-* の脱落によるものである。ちなみに、ガリシア・ポルトガル語の特徴である、母音間の *-l-* と *-n-* の脱落はアストゥリアス自治州西部に分布するガリシア語である、ガリシア・アストゥリアス語の一部では *-n-* のみの脱落を示し、*-l-* を保持している地域がある。ポルトガルのブラガンサ県に分布するアストゥリアス・レオン語にも同じような *-n-* の脱落が起きている。一部には、これをポルトガル語的特徴またはその影響とみなす向きもあるが、単なる思い込み近く、根拠のない可能性である。以下で例を挙げる 13 世紀の叙情詩での *soidade* などは 4 音節語で、16 世紀の Gil Vicente の例はおそらくすべて 3 音節語である。

なお、中世語における *soidade*, *suidade* の意味や用法と、それ以降の時代に現れる *saudade* の間に大きな違いが見られないことから、さらに 16 世紀に入ると *saudade* が普通となり、

soidade, suidade のほうは消えてしまい、現代語には残っていないことから、ある段階で soidade, suidade は saudade に変化したとして、それを説明しようとする試みが行われてきた。Gonçalves Viana や多くの語源辞典では、saúde (<salutem) 「健康」、saudar (<salutare) 「挨拶する」などの影響であるとして、様々な説明が提案されているが、すべて推測で客観的根拠はない。Vasconcellos 1914 はそれを裏付けようとする試みで、中世末期の書簡の形式文の中で soidade, suidade と上の -au- をもつ形式が頻繁に共起することなどを、その影響関係のもととしている。さらに、Vasconcellos 1914 では \*salutatem > saudade への可能性への言及もあるが、salus, -utis から \*salutas, -atis への類推の可能性はロマンス語学的にはあり得ないことではないが、文献などからの実証的根拠がなく、さらにもっとも古い時代に saudade の文証形がないことなどを考えると不自然である。言語学的には文献に現れない語形はあり得るので完全な否定はできないが、積極的に主張する根拠もない。

このように saudade の語源については、sōlītātem > soedade > soidade ~ suidade の部分は、特に問題がないものの、ここから現在の saudade への変化は客観的な説明が難しいというのが現状である。それを踏まえて、文献学的研究をどのように進めるかという問いに対しては、1) 出典のある辞書や語源辞典、研究書、2) 中世の文献、3) 方言や周辺の言語、の順に関連する事象を精査していく以外にないだろうと思われる。

## 2. 語源辞典などによる調査

ポルトガル語研究においてある程度信頼できる語源辞典として、現在では次の3書を挙げる事が出来る。

- 1) Corominas, Joan et José A. Pascual (1984-1991). *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico* 6 vols. Madrid : Editorial Gredos.
- 2) Cunha, Antônio Geraldo da (1986). *Dicionário Etimológico Nova Fronteira da Língua Portuguesa*. 2ª edição. Rio de Janeiro : Editora Nova Fronteira.
- 3) Cunha, Antônio Geraldo da (2014). *Vocabulário histórico-cronológico do Português Medieval*. 2 vols. Rio de Janeiro : Fundação Casa de Rui Barbosa.

1) は、スペイン語の語源辞典であるが、タイトルに castellano e hispánico とあるように、イベリア半島のロマンス語を広く扱っている。見出し語がスペイン語なので、やや不便であったが90年代初めに6巻目の刊行が終了し、巻末に総索引が付き、項目内のイタリックになっている語彙から引けるようになり、使い勝手がかなり向上した。語源に関する情報ではおそらく現在で最も信頼できる辞書である。ただし、注意しなければならないことは、本稿のテーマでもあるが、歴史的な言語変化や語源には、実はよくわからないというものがたくさんある。そ

ういう場合、研究者によって、語源説を基層言語に求めたり、あるいはラテン語のあまり表には出ない現象に頼ったり、さらには基層にしても、イタリアであればオスク・ウンブリアなどの印欧語基層や、イベリア半島の場合はバスクなら現存する言語であるが、いわゆるイベリア諸語などと呼ばれる実態のわからない言語群などとの関係を論じたりすることがある。このような説は単なる仮定であり、説得力のある状況証拠が多少ともあればまだしも、実際にはよくわからないがという頭書きがついてなんとか成り立つものがほとんどである。従って、Corominas だからと言って、権威主義的に信頼してしまうのは考え物である。さらに、アストゥリアス語に関しては、近年の方言や文献の研究成果が反映されていないので、Corominas は信頼できないというのが、現地多くの研究者たちの意見である。とはいえ、最初に参照し、出発点としなければならない辞書である。ポルトガル語でしばしば引用される José Pedro Machado の語源辞典は信頼度が極めて低い学術的にはあまり価値のない辞書と言ってよいだろう。また、語の出典を調べるには Morais の 10 版も参考になるが、これは典拠とする参考文献というより、資料的価値のある参考文献と考えたほうがよい。2) は、ブラジルの語彙学者である Antônio Geraldo da Cunha による語源辞典で、簡潔に語源と意味、時代ごとの形式を示したもので Augusto Magne 以来のブラジルの中世語語彙研究を踏まえたものである。語源に関する細かい説などには立ち入らないという点で、安心して使える辞書といってよいだろう。ただし、今回、saudade についてみたところ、13 世紀の語形として saydade が挙げられているが、これはおそらくラテン語の *sānītātem* ← *sānītās* からの語でやや疑問に思わざるを得ないところもある。3) は、この Antônio Geraldo da Cunha が、13 世紀から 15 世紀までの対象としている文献に現れるポルトガル語の全語彙に関する全用例を網羅したという辞典で、中世語研究者にとっては画期的であった。今回の調査では、この Cunha 2014 に拠った。ただし、調査を通じ漏れもかなりあることや、典拠しているエディションに問題があったりすることも分かった。さらに saudade の語形の研究に重要な Cancioneiro Geral や Gil Vicente が、その刊行が 16 世紀であるため含まれていないというマイナス面もある。

### 3. Cunha 2014 の用例

この辞書は 2000 年に電子版試用版、2002 年、2007 年に電子版、さらに 2014 年に紙媒体によるものが刊行されている。saudade の見出し語のもとに挙げられている用例は以下の 16 例である。なお、出典の記号は以下に示した。

- 1) séc. XIII, CSM, 379.11 [...] el Rey de veer esto avia gran soidade.
- 2) séc. XV, FRAD, I.149.9 [...] avia soidade o cardeall da partida de frey Gill [...].
- 3) séc. XV, INFA, 53.13 Oo meu bõo Senhor que muito me atormenta a grande soidade que

sey que leuaes de my e som çerto que os meus trabalhos foram aazo de vosa mais triigosa morte.

- 4) séc. XIII, CSM, 67.79 Venna logo, ca de ver-l' ei soydade.
- 5) séc. XIV, TROY, I.236.31 [...] me mataron acasybelan meu yrmão de que ey moy gran desconforto et moy gran soydade [...].
- 6) séc. XV, BENF, 233.9 E os beës proueytosos lhes nom façam soydade.
- 7) séc. XV, ZURG, 116.25 [...] demostraua que polla grande soydade que auya de seus parentes e amigos que ja ca eram ã este Regno elle nom saberya viuer se nõ antre elles [...].
- 8) séc. XV, ZURD, 357.17 [...] ao menos a ssoydade o fezera partyr com mayor pena.
- 9) séc. XV, LEAL, 94.16 E a ssuydade nom descende de cadahũa destas partes, mes he hũu sentido do coração que vem da sensualidade, e nom da rrazom, e faz sentir aas vezes os sentidos da tristeza e do nojo.
- 10) séc. XV, INFA, 79.17 E em lhe fechando a porta, dyse lhe o Ifante de dentro que lhe saudase muito aos seus todos e que lhes disese que a suidade e o cuidado que deles tiinha, lhe faria seer sua fim mais çedo [...].
- 11) séc. XV, LEAL, 83.24 Quynta, por nojo, pesar, desprazer, avorrecymento, suidade que se recreçom, ou per natural tristeza da voontade mal ordenada.
- 12) séc. XV, LOPF, 166.52 E em dizendo esto seus graciosos olhos eram lavados d'augua, mostrando gram suidade da filha.
- 13) séc. XV, LEAL, 61.2 Deste pecado yra se podem apropriar outras VI paixõoes: Odio, Tristeza, Nojo, Pesar, Desprazer, Suydade.
- 14) séc. XV, ZURD, 229.29 [...] começaram de partyr com suydade que auyam de suas lauras [...].
- 15) séc. XV, ZURG, 271.21 E ssom certo que aquelles que dally scaparom tarde tornarom ally com suydade que de sua fardagem ouuessem.
- 16) séc. XV, LOPJ, II.72.29 Oo, jrmaão, quamto saudade ey de uos que a tanto que uos nom vij!

出典：

GSM = AFONSO X. *Cantigas de santa Maria*. Editado por Walter Mettmann. Coimbra: Universidade de Coimbra, 1972. v. 4. Texto do século XIII. [Citam-se, nas transcrições, os números da poesia e

do verso, de acordo com o critério de numeração adotado pelo editor.]

FRAD = CRÓNICA da Ordem dos Frades Menores (1209-1285). Introdução, anotações, glossário e índice onomástico por J. J. Nunes. Coimbra, 1918. 2 v. Manuscrito do século XV. [Citam-se, nas transcrições, o número do volume, em algarismos romanos, e os números da página e da linha, em arábicos.]

INFA = ALVARES, frei João. *Trautado da vida e feitos do muito virtuoso sor. ifante D. Fernando*. Edição crítica com introdução e notas de Adelino de Almeida Calado. Coimbra: Universidade de Coimbra, 1960. (Obras, 1). Texto do século XV. [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha.]

TROI = HISTORIA troyana. Edición e introdución de K. M. Parker. Santiago de Compostela: CSIC: Inst. P. Sarmiento de Est. Gall., 1975. Texto do século XIV. [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha, corrigindo-se os lapsos da edição, assinalados por Ramón Lorenzo no volume 9 da revista Verba, 1982, páginas 253-290.]

TROY = PARKER, Kelvin M. Vocabulário de la Crónica troyana. *Acta salmanticensia, filosofía y letras*, Salamanca, 1.12, n. 1, 1958.

BENF = 0 LIVRO da virtuosa benfeitoria do infante dom Pedro. 2. ed. Introdução e notas de Joaquim Costa. Porto, 1940. Reprodução do manuscrito do século XV da Biblioteca Municipal de Viseu. [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha].

ZURD = ZURARA, Gomes Eanes de. *Crónica do conde D. Duarte de Meneses*. Edição diplomática de Larry King. Lisboa: Faculdade de Ciências Sociais e Humanas da Universidade Nova de Lisboa, 1978. Manuscrito do século XV do Arquivo Nacional da Torre do Tombo, Lisboa, Livraria, 520. [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha.]

ZURG = ZURARA, Gomes Eanes de. *Crónica dos feitos notáveis que se passaram na conquista da Guiné por mandado do infante D. Henrique*. Introdução e notas de Torquato de Sousa Soares. Lisboa: Academia Portuguesa da História, 1978. v. 1. Manuscrito do século XV da Biblioteca Nacional de Paris. [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha.]

LEAL = EDUARTE, dom. *Leal conselheiro*. Edição crítica e notas de Joseph M. Piel. Lisboa: Bertrand, 1942. O texto é parte do códice do século XV da Biblioteca Nacional de Paris (Fundo Português, 5). [Citam-se, nas transcrições, os números da página e da linha.]

LOPF = LOPES, Fernão. *Crónica de D. Fernando*. Edição crítica de Giuliano Macchi. Lisboa: Imprensa Nacional: Casa da Moeda, 1975 [Citam-se, nas transcrições, os números do capítulo e da linha, de acordo com o critério de numeração adotado pelo editor; para os vocábulos que

ocorrem no Prólogo, indica-se o número da linha precedido da letra “P”.]

LOPJ = LOPES, Fernão. *Crónica del rei dom Joham Ide boa memória e dos reis de Portugal o décimo*: parte primeira. Reprodução fac-similada da edição do Arquivo Histórico Português (1915) preparada por Anselmo Braamcamp Freire. Prefácio por Luís F. Lindley Cintra. Lisboa: Imprensa Nacional: Casa da Moeda, 1977. [Citam-se, nas transcrições, o número da parte, em algarismos romanos, e os números da página e da linha, em arábicos.]

#### 4. 用例の検討

ここでは、13世紀の *Cantigas de Santa Maria* 『聖母マリア賛歌集』と、信頼度の高いエディションが存在する *Crónica Troiana* 『トロイ年代記』、本稿の筆者自身が写本からテキストの研究を行っている *Crónica da Ordem dos Frades Menores* 『清貧修道士会年代記』の3つのテキストを取り上げることにする。

##### 1) CSM (*Cantigas de Santa Maria*, Walter Mettmann.), Alfonso X o sabio (1221-1284)

これは12世紀末から14世紀中頃までの間に書かれた、当時のガリシア・ポルトガル語の叙情詩群のうち、聖母マリアに関する、主に奇跡などに関する伝承を詩にしたもので、420篇ほどの作品が知られている。すべての作品の作者はレオン・カスティージャ王のアルフォンソ十世 Alfonso X o sabio (1221-1284) である。ガリシア・ポルトガル語で書かれた叙情詩群には他に、恋愛や世俗のテーマを謳ったものがあるが、これらの叙情詩群は、言語的には高度に洗練された文学語で、多少とも人工的なものであると言われる。ポルトガル語ではこれらの詩のことを *cantiga* と呼ぶが、これは音楽に合わせて歌ったり、朗読されたりする中世ロマンス語の詩に対応する、ガリシア・ポルトガル語での名称である。Cunha 2014 には、次の i) と ii) が挙げられているが、他に iii) もある。すべて *aver soidade de...* の表現で用いられ、「~したい、~を望んでいる」の意味で用いられる。編者の Mettmann はグロッサリーで *soidade* に “desejo” 「欲求」の訳をあてている。i) では、それ（建築物）を見たいという、ii) は彼（人）に会いたいという、iii) は（井戸や湧水のような形の）水を欲しているという文脈である。いずれも音節数が4音節であることが確認できる。

##### i) séc. XIII, CSM, 379.11 : 上の 4-1)

.....  
 grande per mar e per terra, | ca logar é dos mellores  
 A que deffende do demo | as almas dos pecadores...

Do mundo pera gran vila | fazer ou mui gran çibdade.

E el Rey de veer esto | avia gran soidade ;

ii) séc. XIII, CSM, 67.79 : 上の 4-4)

Diss' o bispo: "Venna logo, | ca de veer-l' ei soydade."

iii) もうひとつ : CSM, 48.38

Pois ssa oraçon fezeron, | a Sennor de piadade  
 fez que sse cambiou a fonte | ben dentro na sa erdade  
 dos monges, que ant' avian | da agua gran soidade,  
 e des alia adeante | foron dela avondosos.

## 2) *Cantigas galego-portuguesas* の用例

上で触れたように 13 世紀のガリシア・ポルトガル語による叙情詩群には、恋愛や社会風刺などを扱ったものがあり、約 1700 ほどが知られているが、その中でも *soidade* が用いられているものがいくつかある。Cunha 2014 では対象となる文献として挙げられているが、用例はなぜかない。以下は、それぞれ、ポルトガル王で、上のアルフォンソ 10 世の孫にあたるディニス王 D.Dinis (1261-1325) の作とされるもの 2 点、ディニス王の時代に活躍した詩人のジョアン・ゾーロ Johan Zorro, 13 世紀のガリシアの詩人ヌーノ・エアネス・セルゼオ Nun' Eanes Cêrzeo の計 4 点である。今回は全作品の精査を行わなかったが、他にも何点かはあると思われる。iv) と vi) はカンティーガ・デ・アミーゴ *Cantiga de Amigo* と呼ばれるジャンルの詩で、アミーゴ *amigo* はここでは男性の恋人の意味で用いられ、詩の作者は男性であるが、女性の恋人を作品中の 1 人称にし、若い女性から男性への愛をうたう形式の詩となっている。これに対し、v) と vii) はカンティーガ・デ・アモール *Cantiga de Amor* と呼ばれる、男性が女性に対する、ただしここでは身分が上の既婚の女性に対する愛、いわゆる中世の騎士道恋愛をテーマにした作品である。iv) では *com vossa soidade* 「あなた様への思いを抱いて」という表現で用いられているが、他の 3 作品では上の「聖母マリア賛歌集」における同じように *aver soidade de...* の表現で用いられている。v) では、騎士道恋愛の対象の相手である *mha senhor* 「わが貴婦人」(*senhor* は当時まだ男女性共通形) への気持ちを表す *soidade* として、vi) では若い女性に模した詩の中の 1 人称が持つ男性の恋人に対する思いとして *suidade* が用いられている。ond'ey *suidade* = onde ey *suidade*, onde = de + 名詞、ここでの名詞は *amigo* (=恋人) である。vii) は、騎士道恋愛を扱った作品であるが、ここでの *soidade* の対象は、自分が悲嘆に暮れて去っていく、その土地に対するものである。これらの作品での *soidade*, *suidade* が意味するものは、

一見すると、現在の *saudade* の意味に近いような印象を与え、「聖母マリア賛歌集」における *soidade* よりは意味が広いように見える。しかし、騎士道恋愛における女性への愛とは、ある意味で外面的な美から生じる、いわゆる征服の対象としての女性に対する欲求＝性欲と言えないこともないので、そう考えれば *soidade* = *desejo* 「欲求, 欲望」ととることも不可能ではない。さらに、カンティエーガ・デ・アミーゴにおける *soidade* にしても、若い女性が 1 人称の主体だからといって、それがいわば現代の *saudade* が表す、いわゆる「不在に伴うそこはかたない思い, 懐かしさ」である必然もないように思える。カンティエーガ・デ・アミーゴに隣接する時代の、その影響が比定されているアラブ文学の短詩ハルジャ *harjas* におけるテーマは恋人との逢引の場において取られる性交のさまざまな体位であったり、ある意味で極めて物欲に近い欲求である。中世の人々の心理を現在の我々の価値観から判断することはできないので、これらの *soidade*, *suidade* の意味を推定するのは難しい。しかし、vii) の、これから去ろうとしている今いる土地に対する、未来における *soidade* は、より現代の意味に近いかもしれない。なお、これらの語はすべて 4 音節である。作者の生きたであろう時代から作成年代が 13 世紀から 14 世紀初めに想定されるが、これらの作品を伝承する写本の二つ(B と V と省略表記される)はいずれも 1525 年から 26 年にかけてローマで筆記されたことがわかっている。

iv) D.Dinis (1261-1325), *Cantiga de Amigo*, B578, V181

Nom poss' eu, meu amigo,  
 com vossa soidade  
 viver, bem vo-lo digo;  
 e por esto morade,  
*amigo, u mi possades*  
 falar, e me vejades.

v) D.Dinis (1261-1325), *Cantiga de Amor*, B526a, V119

Que soidade de mha senhor ei  
 quando me nembra d' ela qual a vi,  
 e que me nembra que bem a oi  
 falar; e por quanto bem d' ela sei,  
*rogu' eu a Deus que end' a o poder,*  
*que mh a leixe, se lhi prouguer, veer*

vi) Johan Zorro (Dinis 王の時代に活躍? ポルトガル人?), *Cantiga de Amigo*, B1156, V758

Met' el-rey barcas no rio forte;  
 quen amig' á que Deus lh' o amostre:  
*alá vay, madr', ond' ey suidade!*  
 Met' el-rey barcas na Estremadura;  
 quen amig' á que Deus lh' o aduga:  
*alá vay, madr', ond' ey suidade!*

vii) Nun' Eanes Cêrzeo (13 世紀, ガリシアの詩人), Cantiga de Amor, B135

Pero das terras averei soidade  
 de que m' or' ei a partir despagado;  
 e sempr' i tornará o meu cuidado  
 por quanto ben vi eu en elas ja;

### 3) Crónica Troiana

『トロイ年代記』はトロイア戦争がテーマの、中世に広く流布した物語である。テキストは 14 世紀のガリシア語の写本に拠るが、エディションとしては、Lorenzo 1985 が最も新しく、信頼度も高い。Cunha 2014 が依拠した Kelvin Parker のエディションは、Lorenzo 1985 によれば誤りなどが多く、問題であるという。Lorenzo 1985 から該当部分を取り出してみる。

... ca oje en este día sabede que me matarõ a Casybelã, meu yrmão, de que ey moy grã  
 desconforto et moy grã soydade, ca el era moy bon caualeyro et de moy grã proheza.

(Lorenzo 1985, p.353, 136-22, fol.56v)

よき騎士で勇敢であった、殺された自分の兄弟のカシュベランに対する気持ちを desconforto と soydade という語によって表している。soydade は、既に存在しない愛しい者に対する、悲しさの混じった哀愁の情であろうか。写本は中世ガリシア語によるものであるが、マドリードにあるスペイン語の写本を翻訳したもので、Lorenzo 1985 は、そのスペイン語の写本は、ポルトガル語またはガリシア語の別の写本から写されたものではないかとしている (ibid.,p.202)。

### 4) Crónica da Ordem dos Frades Menores (1209-1285)

13 世紀末、あるいは 14 世紀初めにラテン語で編纂されたフランシスコ修道会の年代記の中世ポルトガル語訳で、リスボンの国立図書館 Biblioteca Nacional de Portugal の分類番号が

Iluminado 94 という 15 世紀中頃の写本がもとの資料である。このテキストが翻訳された経緯や、この写本のもとのテキスト、ラテン語から訳されたのか、中間に別の言語を媒介としているのかなど詳しいことはわかっていない。1918 年にポルトガルの José Joaquim Nunes がエディションを公刊しているが、Nunes は中世語のテキストが、直接、ラテン語から訳されたと仮定し、当時、イタリアで刊行されていたラテン語テキストの校定本 *Analecta Franciscana 1897* をあたかもオリジナルであるかのようにみなし、部分的には、ラテン語にそって中世ポルトガル語のテキストを訂正するというような誤りすら犯している。

該当部分を写本から転記してみる。

E como ganhou leceça do senhor cardeal e quisesse tomar seu caminho. Auia soidade o cardeall da partida de frey Gill e de seu companheiro. E aueendo delles compasom, disse-lhes: Adomde quereedes hir? Ca ydes asy como as auees que nō tem nihnhos.

これに対応するラテン語の部分は以下である。avia soidade (soidade を持っていた、抱いていた) にあたる部分は, *dolens multum* とあり、主格の現在分詞構文で「大いに痛みを感じつつ」くらいの意味であろうか。

Cumque, obtenta licentia a domino Cardinali, iter vellet arripere cum socio, dolens multum ipse dominus Cardinalis de eorum recessu et eis multum compatiens dixit: «Quo ibitis? Itis enim sicut aves non habentes nidos».

ここでの意味は、しばし生活を共にした修道士ジルが去っていくことに感じる、心の痛みを表す *soidade* であり、『トロイ年代記』の *soydade* にも通ずるものがある。いずれも、失われた、あるいは失われるであろう対象に対する悲しみを伴った感情の表現と言える。

## 5. saudade ~ soidade と翻訳

ポルトガルのロドリゲス・ラパ *Rodrigues Lapa* の中世文学に関するマニュアルの中に *saudade* と翻訳に関する興味深い記述がある。1873 年に *Teófilo Braga* が、中世に広く読まれた騎士物語の *Amadis de Gaula* のスペイン語版のテキストについて、スペイン語の *soledad* の用法がスペイン語的ではなく、むしろポルトガル語の *saudade* に近く、これはこの作品がもともとポルトガル語で最初に書かれたからと主張しているという (*Lapa 1981, p.278*)。Teófilo Braga 特有の単なる愛国的歪曲であるかもしれないのだが、*saudade* とその翻訳における対応語という点では興味深い指摘である。*Amadis de Gaula* はポルトガル語版は痕跡もとどめていないので、この問題を調べることは難しいだろう。しかし、*Amadis de Gaula* の内容的に後継の作品である *Palmeirim de Inglaterra* は、ポルトガル語版もスペイン語版も残っていて、おそらくポルトガル語版がオリジナルであるが、ここではポルトガル語版に現れる 57 例の

saudade は、スペイン語では 3 回は省略され、残る 54 例は soledad, deseo, cuidado, alegria など文脈によって異なった語に訳されているという (p.279).

### 終わりに

以上、13 世紀から 15 世紀における文献での *soidade* ~ *suidade* の使用などについてみた。韻文である *cantigas* の更なる調査や散文での使用などを精査する必要がある。特に、中世ポルトガル語の文献が翻訳である場合、もとの言語での表現を見る必要もあるだろう。*saudade* という語形が現れるのは 15 世紀であるとされているが、この点についても文献や写本の調査が必要である。これらはすべてポルトガル語内部での調査であるが、実は、アストゥリアス語では *señardá* という語があり、これはカスティーリャ語にはないアストゥリアス語特有のものであると言われていて、語源はラテン語の *singularitatem* で、ミランダ語の対応語は *senhardade* である。意味的には、ほぼ、ポルトガル語の *saudade* に対応する語であるが、このあたりもさらに調べる必要がある。

### 参考文献

- Analecta Franciscana sive Chronica Alilaque Varia Documenta ad Historiam Fratrum Minorum*, 1897, Claras Aquas (Quaracchi)
- Coelho, Jacinto Prado (dir.) (1984). *Dicionário de literatura. 3ª edição*. Porto:Figueirinhas.
- Guedes, Fernando (dir.) (2008). *Dicionário Verbo Língua Portuguesa. 2ª Edição*. Lisboa: Editorial Verbo.
- 池上岑夫, 牛島信明, 神吉敬三, 金七紀男, 小林一宏, フアン・ソペーニャ, 浜田滋郎, 渡部哲郎 (監修) (2001). *スペイン・ポルトガルを知る事典, 新訂増補版*, 東京: 平凡社.
- Lapa, M. Rodrigues (1981). *Lições de Literatura portuguesa, época medieval. 10ª edição*. Coimbra: Coimbra Editora.
- Lorenzo, Ramón (1985). *Crónica Troiana, Introducción e Texto*. A Coruña: Fundacion Pedro Barrie de la Maza.
- Sequeira, F.J. Martins (1957). *Apointamentos acerca do falar do Baixo-Minho*. Lisboa:Revista de Portugal.
- Vasconcellos, Carolina Micaelis (1914). *A Saudade Portuguesa*. 144pp. Porto:Edição da Renascença Portuguesa.

## Para o estudo filológico da palavra *SAUDADE*

KUROSAWA Naotoshi

Há vários e inúmeros estudos sobre a saudade portuguesa, mas, de ponto de vista filológico, o assunto é relativamente simples. Na filologia, ou nos estudos linguísticos, o que se importa é a forma linguística e o seu uso. Para mostrar o essencial do problema o autor examinou e tentou localizar as ocorrências da palavra *saudade* e as formas relacionadas.